

卒業生に聞く！

ボランティアから つながる一歩

- 卒業生が語る未来の話 -

話し手：水越 智一さん（2018年度 卒業生）

聴き手：齋藤 元気（ボランティアコーディネーター）

2021年 4月30日(金)

報告

■ 卒業生が学生時代を振り返る！

4月22日、30日の二日間、学生時代に「都立大ボランティアプログラム」や「学生コーディネーター」といったボランティアセンターが運営する活動をはじめ、学内外の多種多様なボランティア活動に参加してきた卒業生二人をお招きし、「ボランティアからつながる一歩-卒業生が語る未来の話-」をオンラインで開催しました。

7名にご参加いただいた30日（金）の第二回では、ゲストの水越智一さんから、学生時代にボランティア活動を通して得た経験や気づき、さらに、現在社会人として活躍されている立場から、学生時代のボランティア活動経験が現在のキャリアに、どのように活かされているのかについて、様々なエピソードとともにお聞きしました。

■ 第二回：水越 智一（みずこし ともかず）さん

2018年度 卒業生（2016年度 学部卒業）：

システムデザイン学部 航空宇宙システム工学科
→システムデザイン研究科 航空宇宙システム工学域

現在の職業：自動車部品メーカーの設計

学生時代は、東日本大震災の被災地支援（宮城県七ヶ浜町）をはじめ、東京マラソンなどのスポーツボランティア活動に取り組む。また、都立大ボラセンの初代学生コーディネーターとして、都立大ボランティアの機運醸成にも取り組んだ。

質問

自己紹介をお願いします！

私は水越智一と申しまして、2019年の3月に卒業して、今ちょうど3年目になったところです。出身は東京で、当時の首都大学東京 システムデザイン学部 航空宇宙システム工学科に入学をしました。その後、そのまま大学院に進学して、そこを卒業してからは、愛知県にある自動車の部品メーカーに就職したので、今は愛知県に住んでいます。

学生時代は、1年生の終わり（春）頃からボランティア活動を始めて、当時はよく東日本大震災の復興支援ボランティアの活動をしていました。僕が大学に入学した時には、実はボラセンはなかったのですが、3年生の終わりの時にできたので、そこからボラセンの活動に参加するようになって、障がい者の方の支援やスポーツボランティアといった災害ボランティア以外の活動もするようになりました。



ボランティアって何？
どんなことをするの？

ボランティア活動の魅力って？
自分の将来にどう活かされるの？

東京都市立大学
Volunteer Center
卒業生に聞く！
ボランティアからつながる一歩
-卒業生が語る未来の話-

DAY2
4.30

ゲスト
水越 智一さん
2018年度 卒業生（2016年度 学部卒業）
システムデザイン学部 航空宇宙システム工学科
→システムデザイン研究科 航空宇宙システム工学域
現在の職業：自動車部品メーカーの設計
学生時代は、東日本大震災の被災地支援（宮城県七ヶ浜町）をはじめ、東京マラソンなどのスポーツボランティア活動に取り組む。都立大ボラセンの初代学生コーディネーターとして、都立大ボランティアの機運醸成にも取り組んだ。

開催日：04.22/04.30 昼休み（12:10-12:50）
会場：オンライン（Zoomミーティング）

質問



ボランティア活動を始めたきっかけがあれば、教えてください！

はい。身内の方にはすでによく知られている話なのですが、僕はもともと理系を志して航空宇宙（システム工学科）に入ったということもあり、正直に言うとボランティア活動には全く興味がなくて、自分がやるとも思っていませんでした。どうしてこういうことになったかと言いますと、大学入ってすぐの頃に初めて彼女ができたのですが、まあその方と別れることになりまして、その後、初めてだったからなのか分からないのですが、半年ぐらい引きずっていました。これはどうしようもないなあ、ずっと思っていたのですが、その時にたまたま「東北の震災ボランティア3泊4日」というのが、しかも13000円でそれなりの旅館に宿泊ができて、交通費も入っていて、というのが目に入ってきました。全然ボランティアなんてする気はなかったのですが、本当に「気晴らしの旅行ぐらいでちょうどいいなあ」と思って、「ちょっと遠くに行ってみよう、宮城県なんて行ったこともなかったし」ぐらいの感じで申し込んだのが、本当の一番最初です。

そこで3泊4日、大学生協が主催していた活動だったのですが、北は青森から、南は鹿児島の方からわざわざ来ている人もいて、全国の同年代の学生の人たちとコミュニケーションをとりましたし、それ以上に、テレビの向こうの世界だった、テレビでしか観ていなかった津波にのまれた街とか、あとはやつれた顔をしていて避難をしている人とかを目の当たりにして、テレビで観るものと実際に見るものと全然見え方が違ったっていうのは、ものすごく衝撃的でした。そこから、僕の場合は、その役に立ちたいという気持ちよりも、「あのとき何があって、ここではどういうことがあったのかをもっと知りたい」という気持ちが強くなって、1年生の終わりに参加した3月のボランティア活動から、2年生の夏に、2年生の春にと、長期休暇ごとに東北の震災ボランティアに行くようになりました。

きっかけはこのような感じですね。



一番最初のボランティア活動が、宿泊を伴うものでしたが、参加するうえでのハードルは高くなかったですか？

そのハードルは高かったので、友達2人を巻き込んで一緒に行きました。「こういうボランティア活動があって、しかも13000円だから、そこまで高くないから行ってみようよ」という誘い方をしたのですが、内心は「ただの気晴らしに行きたい」、最初はですよ、最初は気分を変えたくて行ってみたいということで始めたボランティアでした。

たしかに自分一人だけで参加するのではなく、仲間を誘うというのは、一歩踏み出すうえでの一つのポイントになるかもしれないですね

質問

活動を通して「もっと知りたい」という気持ちが強くなったとのことでしたが、具体的に知りたいと思ったことってどんなことですか？

初めて行った時に衝撃的だったこ

とがあって、その時活動したところが海岸

近くの方の家だったので、そこに向かって宿舎

からバスで移動をしたのですが、宮城県はもちろん田舎の方

の都市なので、畑だとか田んぼだとかが広がっていて、バスで道路

を走っていても平坦というか、周りに高い建物があまりないということ

を当然のように見ていました。でもしばらくして、さっきまで畑や田んぼだった平らなところが気付いたら家の基礎だけ残っているような風景になっていて、そこでまず一つ衝撃を感じましたね。

あの時、ここまで波は本当に来ていて、「もしここに残っていたら死んでいたかもしれない」というようなことを感じました。でもその当時活動させてもらっていた畑のオーナーはなんというか、もちろん僕が初めて行ったのが2014年で、ある程度（震災から）時間が経っていたということもあるのですが、なんか「本当にこの人はあの当時宮城県にいたのかな」みたいな、ヘラヘラしているわけではないですが、特に悲しさが滲んでいるようにも見えず、にこにこしてくれて、「来てくれてありがとう」と言ってくれていました。その畑をもっているのは、割と若い30代前半くらいのお兄ちゃんたちだったので、彼女がどうかの話をみんなでしたりしていたのですが、そういう話をしている中でも、やっぱり自然と当時の話、「あの日は自分はどこにいて、何をしていたんだ」という話もしりましたし、僕たち学生も話したりして、生き残った人の中でも人それぞれ経験してきたことはそれぞれバラバラなんだなとも感じました。

あとは、宮城県に初めて行ったので、地域性のようなものとは少し違うかもしれませんが、「こっちの方の人たちって、こんなおもしろいんだ」ということを感じましたし、僕は理系の人間なのですが、ボランティア活動をしている人たちってどちらかという文系だとか、あるいは福祉系の学生の人が多いように思っていて、そういう人たちと関わることがそれまであまりなかったので、話すとおもしろかったですね。「そういう考え方をもってるんだ」みたいな。

自分は割と理屈立てていろいろ物を考えがちではあるのですが、良い悪いとかではなく、そういうボランティア活動の世界で出会った人たちは割と感情論でものを話すことも多々あって、本当に「自分が今まで関わってこなかった人と、こういうところに来ると関わることができるのか」というか、そこがとてもおもしろかったので、もっと知りたいとか、もっといろんな人の考えを聞きたいというのが、そこで初めて出てきましたね。

質問

その後始めたスポーツボランティアプログラムの活動では、印象に残っていることはありますか？

基本的に1年目の活動では、障がいのある方のスポーツ大会やパラスポーツ大会の支援がメインだったのですが、始める前は僕自身、「障がいのある人たちって変だな」という考えがありました。どちらかと言えば、あまり関わりたくないなと思っていたのですが、スポーツボランティアに誘われたこともあって、「本当に嫌だったらやめればいい」と思って、とりあえず1年とやってやりました。その中で本当に印象的だったのが、9月ぐらいいあった「スポーツの集い」という都内の障がい者施設の方が集まって、玉入れとか、大玉転がしとか、リレーをする合同運動会みたいなイベントでした。その時に、リレー

で出てきた参加者の人がめちゃくちゃ足が速かったんですね。僕より全然速くて、それを見た時に、障がいのある人ってもちろん知的障がいと言われる人は考えることや判断が遅かったりする部分があるかもしれないですが、別にそれ以外はなんら僕と変わらないし、むしろ僕よりも長けている部分があると、そこで気付かされました。それも実際に目の前で見て、目の当たりにしたことでなんか自分の考え方が変わりましたね。ただの個性なのに、障がい者施設に入って仕事をしたり、生活をしたりしてっていう、その僕との差はなんで生まれるんだっていうのも疑問点として出てきたりもしました。それに周りにいる自分の友達とか、同級生と大差ないなっていうことにも気付いて、別に障がい者の人を避ける必要なんて無いし、道端で困っていいような顔をしていたら助けてあげればいいし、別にそうでなければそのままでもいいし、ある意味気を遣わなくなりましたね。そういう考え方をスポーツボランティアで得ることができたかなと思います

質問

学生時代のボランティア活動の経験は、現在のキャリアにどのように活かしていますか？

僕は製造業に勤めているので、

当時の経験が直接今に活かしているかと言わ

れると、活かないことの方が多いですね。

ただ最近、SDGsの話であったり、東京オリンピック・パラリンピックがあるという話であったりが目ざされ

ている中で、会社で、例えば言葉遣いですね、「相手の人にどう伝えるかを考えて言っても、自分が話してる相手はもしかしたら障がいのある人かもしれないとか、LGBT、性的マイノリティの人かもしれない」というようなことを研修で学んでいます。「言葉遣いには気をつけましょう」とあるとか、「こういう人がいたらこういう対応をしましょう」というようなことを教えられるのですが、僕にとっては学生の時にかなり学べた内容だったので、「ああ今更やっているんだ」というのが正直なところでした。逆に言うと、他のみんなは会社に入ってから学ばなければいけないのかもしれないけれど、それをもともと知ることができていたので、それが社会人になってから活かしているとか、困らなかったことかなと思います。



研修で学ぶことと、ボランティア活動を通して学ぶことに違いはありますか？

研修で受けるのはつまらないですよ（笑）

研修はやっぱり全員問答無用で受けさせられるので、障がい者だとか性的マイノリティだとか、外国人だとか、興味が無い人も受けなければいけないですね。僕はたまたまそういう人たちに興味があったという言い方は変ですが、そういう考えをもっていた方だと思います。あとは、学生時代に学んだ方がやっぱり「講師対自分」ではなくて、「当事者対自分」になるので、その方が内側というか、表面上ではない話ができるのかなと思います。

参加者の声（一部）

- ・社会人の方から学生時代の話聞く機会があまりないので、とても勉強になった
- ・ボランティア先での体験談が印象的だった。自分ももっといろんな人と関わってみたいと思った
- ・東北の震災ボランティアの話が、自分たちと何ら変わらない方々が突然災害にあわれた、その理不尽さが率直なお話で、強く印象に残りました。



都立大ボラセンYouTubeチャンネルにて
当日の様子を公開中！

